

# 実践的指導力の育成に資する「学びの森教育プラン」の中間評価 —〈体験〉と〈省察〉を基軸とした2年間の実践を踏まえて—

友田 靖 雄\*

## Mid-point Evaluation of the “Manabinomori plan” which Intended to Improve Practical Teaching Ability — 2nd Year Reseach Report Based on Student’s Experience and Reflection —

Yasuo TOMODA

本学「子ども学部」が昨年度から「教育学部」と名称を変え、小学校教員を目指す学生たちのための体験的教職科目群「学びの森教育プラン」が新設され、今年で2年目を迎えた。完成年度は2年後の2018年度である。

「学びの森教育プラン」は、教育実習（3年後期）に臨む準備教育の一環として、また教師としての実践的指導力（教師力）の基礎を育成し併せて教師を目指す意志をより確かなものとする目的から設けられた体験的教職科目群である。今年で実施2年目を迎え、現在の2年生は、「教育現場参観」（1年後期）、「授業実践演習Ⅰ」（2年前期）を履修し、現在（2年後期）、「教育現場体験Ⅰ」・「授業実践演習Ⅱ」を履修中である。

「学びの森教育プラン」は体験科目群であるが、単に体験機会を提供すれば実践的指導力が身に付くものではない。どのように〈体験〉させ、どのように〈省察〉したらよいか肝要である。したがって、2年目のこの段階で、当初の目的は達成されつつあるのか、学生の履修状況（学修姿勢、レポート）などを参考に、〈体験〉と〈省察〉を基に中間評価し、3年次以降に予定されている今後の科目運営に生かしていきたい。

キーワード：学びの森教育プラン、体験と省察、実践的指導力の育成

### 1 「学びの森教育プラン」導入の経緯

#### (1) 教員養成審議会の答申を踏まえて

「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」において、教員養成審議会は、教員の養成段階で修得すべき水準を「教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」と指摘している。これは、初任者であっても、採用直後から学級担任等の重責を担わなければならない教育現場の事情を踏まえ、大学の責任で、教員

を志願する者に一定水準以上の知識・技能を修得させる必要があることを示したものである。

この「一定水準以上の資質・能力」を修得させるために教職課程の改善を求めている、その基本的視点として、今日求められる資質能力（①地球的視野に立って行動する為の資質能力、②変化の時代を生きる能力、③実践的指導力につながる資質能力）のうち、③にかかわって次の2点の資質形成を挙げている。

- ① 幼児・児童・生徒観、教育観といった子どもに関する適切な理解。

\*教育学部子ども教育学科

② 教職に対する情熱・使命感、子どもに対する責任感、興味・関心。

そして、これらの資質を身に付けさせるためには、子どもたちと実際にふれあったり子どもたちを観察する機会が大切である。また、教育実習や選択科目、課外における諸活動を通して、こうした機会が教員を目指す学生に少しでも多く提供されることが望ましい、と指摘している。また、そのためには、各種のふれあいや観察の機会を設けたり、教職に関する理解の増進等を適切に図ることが適当であろうと述べている。

(2) 「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクトの提言から

「今後の国立の教員養成系大学学部の在り方について(報告)」を受け、日本教育大学協会では「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクトを発足させ、2004年3月、「教員養成における『モデル・コア・カリキュラム』の研究—『教員養成コア科目群』を基軸にしたカリキュラムづくりの提案—」を答申した。

この中で、〈体験〉と〈省察〉の往還をカリキュラムづくりの基軸にして、そこに教養教育・教育科学・教科教育学・専門諸科学の科目群が有機的に関連づけられることによって、教員としての力量(実践的指導力)が螺旋的に発達していくカリキュラムモデルが提案された。これを受け、多くの大学によって〈体験〉と〈省察〉を軸としたカリキュラム改革が実施され、その事例も『教員養成カリキュラムの豊かな発展のために—〈体験〉と〈省察〉を基軸とした「モデル・コア・カリキュラム」』の中で紹介されている。国立大学のみならず一般大学の教員養成学部等でも、〈体験〉と〈省察〉を含めたカリキュラムを導入したところが多い。

この〈体験〉と〈省察〉については、岩田康之が『教員養成教育のカリキュラムモデルの検討』の中で、「教員養成教育が学問性と実践性の往還の中で力量形成を果たしていくことを旨とする以上、子どもの成長に関わる〈体験〉的要素と、その〈体験〉したことから振り返り〈省察〉は、教員養成におけるカリキュラムの根幹をなす。それ故に〈体験〉—〈省察〉それぞれの量的・質的充実は重要な課題である。…略…〈省察〉については、それぞれが〈体験〉したことを科学

的・構造的に捉え返し、次なる教育活動の構築に向けられなくてはならない」と述べている。

(3) 本学の教員養成方針から

近年、学校教育を取り巻く課題は、いじめ等生徒指導上の対応、特別支援を要する児童・生徒への対応、家庭や地域との連携教育の課題など、極めて多岐にわたっている。これからの学校教育を担う教員は、こうした諸課題に応えることのできる力量を身に付けていなければならない。こうした背景を受けて、本学部では次のような人材(教師)を育てることを目指している。

子どもに関する今日的諸問題に対応できる理論と技術について学び、幅広い教養と深い専門的知識を身に付けた教育界に貢献し得る人材

上記のような人材を養成するため、学年段階ごとに次のような「目指す学生の姿」を設定している。

- ◇1年次：教育現場の見学や学修を通して、自分が目指す教師像を描く
- ◇2年次：教育現場での体験や学修を通して、自分の描いた教師像を確かめる。
- ◇3年次：教育実習や学修を通して、実現目標としての教師像へとつなげる。
- ◇4年次：学校教育・幼児教育に関する学びと実践統合する。

本学教育学部では、主として幼稚園教員・保育士を目指す「発達支援コース」と、主として小学校教員を目指す「子ども教育コース」の2つのコースで保育者・教育者の養成を行っている。「学びの森教育プラン」で履修対象となっているのは、「子ども教育コース」の学生たちである。しかしこの学生の中には、小学校教員免許状の取得だけを希望し幼稚園教員を目指す学生も含まれている。そのため、小学校教員を目指していた学生の中には、途中から進路を変更し幼稚園教諭や他の職種に進むケースもよく見られた。

本学では、こうした事情を踏まえ、小学校教員の養成に一層力を注ぐ意図から、昨年度から、学部名を「子ども学部」から「教育学部」に変更し、教員養成カリキュラムも、他大学が既に進めている〈体験〉と〈省察〉を軸としたカリキュラムを導入する

ことで、教師を目指す上で必要な教師力（実践的指導力）の基礎を養成し、併せて進路決定に資するために、今回「学びの森教育プラン」を新設するに至った。

## 2 「学びの森教育プラン」の概要

「学びの森教育プラン」として新しく設けた科目は図1にある3科目群9科目である。何れも体験的教職科目である。従来からの科目は網掛けをした4科目である。「小学校教育実習指導」については、一昨年度までは2年後期から3年通年の4単位の科目となっていて、指導案作成や模擬授業などに時間をかけて教育実習に臨ませるようにしていた。この「学びの森教育プラン」で新設した科目は、従来の「小学校教育実習指導」の内容を整理して2科目群6科目とし、新たに「学校インターンシップ」3科目を加えたものとなっている。小学校教育実習までの6科目は、何れも3年生後期に履修する「小学校教育実習」のための準備教育を兼ねたものである。

なお、「学びの森」は大学の南に広がる各務原市民の憩いの森の愛称である。本学は、この森の一角に位置することから「学びの森教育プラン」と名付

けることとした。

図1の「学びの森教育プラン」では、学年ごとに相互に有機的な関連をもちながら、また従来からの教職科目や教科科目、教養科目等と相互に関連をもちながら螺旋的に発達し、4年後期の必修科目「教職実践演習」を経て実践的指導力を獲得していく過程を示したものである。

### (1) 教育現場参観（1年後期 1単位）

9月と2月に2日間、各務原市内の同一小学校において実習する。その前後に事前指導、事後指導を実施する。この科目は、小学校で生活する児童と直接触れ合うことで、小学校における児童理解を深めることを主目的とする。また児童とかかわる教師の存在、職務等にも関心をもたせる。

小学校参観の日程は、学校長講話、朝の会・授業（2時間）参観、休み時間・給食・掃除、研修反省会（5限）となっていて、ほぼ1日、学生は児童と共に過ごすプランとなっている。

### (2) 教育現場体験Ⅰ（2年後期 1単位）

各務原市内の小学校2校で実習する。うち1校では、教師の主たる業務である授業を参観（2時間）

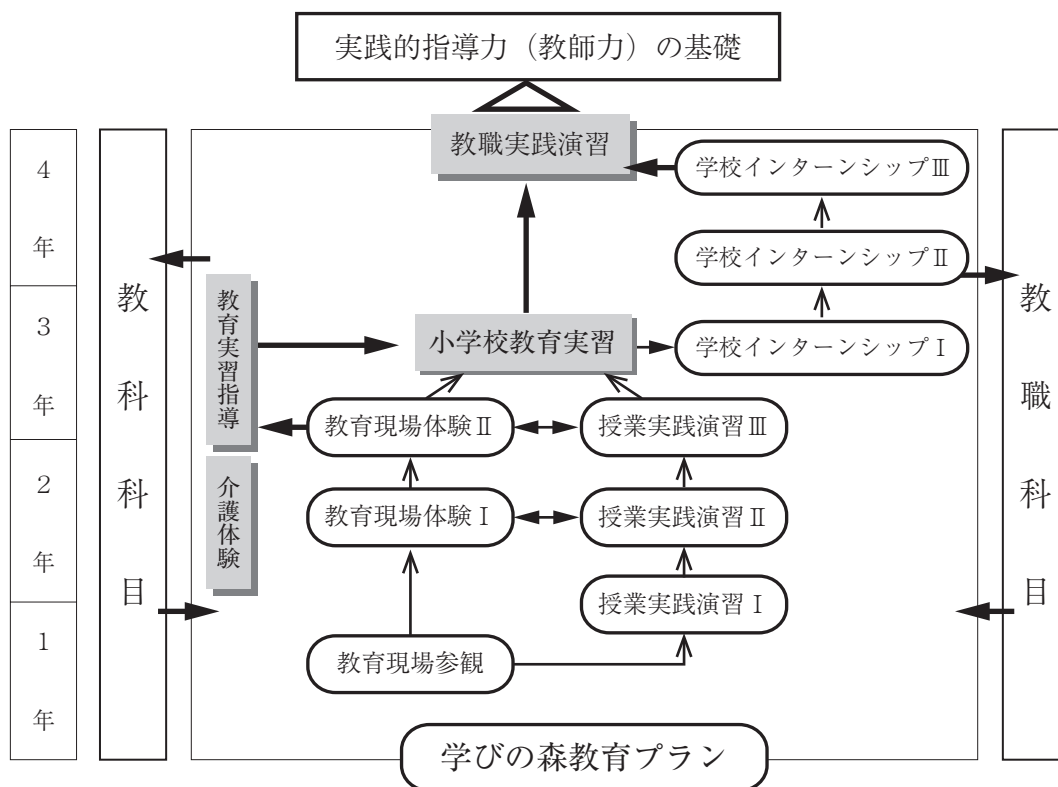


図1 「学びの森教育プラン」全体構造

し、別の1校では研究発表会に参加し、授業、分科会(研究会)にも参加する。この科目は、自分の将来像である「教師の職務」としての授業や学級経営について理解することを目的としている。さらに、この科目を通して、「学ぶ者の立場」にいた学生の意識を「教える者の立場」に転換させることも意図している。

### (3) 教育現場体験Ⅱ(2年前期 1単位)

各務原市内の中学校1校(中学校)、幼稚園1園で実習する。中学校では1年生の授業を、幼稚園では年長クラスの保育を参観し、幼児・児童・生徒の成長発達と幼・小・中教育の連続性について具体的に体感させ、小学校の教員として身に付けるべき知識・技能をより明確にする。

### (4) 授業実践演習Ⅰ(2年前期 1単位)

国語・算数の指導案作成の基本を理解し、その指導案を基に模擬授業・授業評価を行う。また市内の小学校で国語・算数の授業を参観することによって、授業構成能力、実践能力の基礎を体得する。

### (5) 授業実践演習Ⅱ(2年後期 1単位)

社会・理科の指導案作成の基本を理解し、その指導案を基に模擬授業・授業評価を行う。また市内の小学校で社会・理科の授業を参観することによって、授業構成能力、実践能力の基礎を体得する。

### (6) 授業実践演習Ⅲ(3年前期 1単位)

道徳の指導案作成の基本を理解し、作成した指導案をもとに模擬授業・授業評価を体験し、道徳の授業研究、授業実践能力の基礎を体得する。また、教育実習を直前に控え、授業実践演習で学んだ知識・技能を活かし、市内の小学校で、授業参観(示範授業)し、教育実習での授業実践に備える。

### (7) 学校インターンシップⅠ(3年後期)

### (8) 学校インターンシップⅡ(4年前期)

### (9) 学校インターンシップⅢ(4年後期)

各務原市内の小学校で、学習指導補助、生活指導補助、特別支援を要する児童への支援補助、教材作成補助等、20時間程度の実習を行う(学生と学校側で日時・内容を調整する)。各科目とも、事前指導

に2時間、事後指導に2時間を充て、事後指導では、学び得たことの省察を行い、より確かな実践的指導力の基礎を体得させる。

## 3 教育委員会・学校との連携

「学びの森教育プラン」の成否は、教育委員会や小中学校の理解や協力が得られるかにかかっている。幸い本学は、各務原市教育委員会との間で「連携に関する協定」を締結していて、小学校教育実習については、以前から、市内の小学校で教育実習を引き受けてもらっていた。こうした経緯もあり、「学びの森教育プラン」の新設に当たっても学外実習の協力を得ることができた。

この連携協定に基づき、毎年12月または1月に、「小学校教育実習連絡会議」を設け、学長以下大学側の関係者、事務局長以下教育委員会側関係者、校長会長以下校長会関係者が出席して、その年度の学外実習の実際、次年度の学外実習の概要について話し合い、より望ましい連携の在り方について審議・検討している。

今年度(2016)は、下記の小学校で学外実習を引き受けてもらった。尚、これ以降に記載してある小学校名の表記については、各務原市教育委員会、関係小学校長の承認を得ている。

#### ① 教育現場参観(1年後期)

・各務原市立鶴沼第二小学校、同鶴沼第三小学校

#### ② 教育現場体験Ⅰ(2年後期)

・各務原市立那加第二小学校、同鶴沼第一小学校(市指定研究発表会参加)

#### ③ 授業実践演習Ⅰ・Ⅱ(2年後期)

・各務原市立那加第三小学校

## 4 「学びの森教育プラン」の実践 —体験と省察をふまえて—

「学びの森教育プラン」実施初年次に入学した子ども教育コース現2年生が、これまでに、「教育現場参観」、「授業実践演習Ⅰ」を履修し、現在「教育現場体験Ⅰ」、「授業実践演習Ⅱ」の2科目を履修中である。

今回、体験後の省察を行う科目は、既に履修した「教育現場参観」(2015後期)と履修中の「教育現場

体験Ⅰ」(2016後期)の2科目である。体験の実際、事後指導時の省察を踏まえ、学生の記録等から評価することとする。履修中の「授業実践演習Ⅱ」については、学生アンケートを基に一部取り上げることとする。

**(1) 教育現場参観 (2015年9月～2月)**

学生を3チームに分け、各務原市立鵜沼第一小学校、同鵜沼第二小学校、同鵜沼第三小学校に9月と2月の2日間、同一学校・学級で実習した。同一学校・学級にしたのは、児童理解を深め、半年間の時間枠の中で、学級集団や児童個々がどの程度成長を

遂げるのか、体験的に理解させることを意図したからである。

事前指導に5コマ、事後指導に4コマ、現場体験(2日間)に6コマ、全体のまとめに1コマ充てた。事前指導では、参観校の情報、一日の日程、課題設定、諸注意等に充て、事後指導は体験で学び得たことを省察することによって、小学校で生活する児童についての理解を図った。

＜体験＞

学校参観の一日の日程は次のとおりである(鵜沼第一小学校第1回参観の場合)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校集合…点呼</li> <li>・朝の会参観(各担当クラス)</li> <li>・第1限…校長講話</li> <li>・第2限…授業参観1(担当クラス担任)</li> <li>・休み時間…児童と一緒に遊ぶ</li> <li>・第3限…授業参観2(担当クラス担任)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第4限…学教環境理解 (整備ボランティア)</li> <li>・給食の時間(一緒に配膳、食事)</li> <li>・昼休み…児童と一緒に遊ぶ</li> <li>・掃除…児童と一緒に掃除する</li> <li>・第5限…研修会(参観で学び得たこと)</li> </ul>
---	--

第1回体験では、一人ずつ1クラスに担当し、上のような日程でほぼ1日学修した。学生にとっては自身が小学生以来の小学校体験で、緊張しながらの実習スタートであった。しかし休み時間には児童の方から積極的に働きかけてきたりしたこともあり、給食の時間や掃除の時間には、児童と進んで交流する姿が多く見られた。体験終了時には、充実感に満ちた表情の学生が大半であった。

第2回の参観もほぼ同様の日程で実施したが、学生に対しては、「朝の会での児童への2分間講話」、「休み時間のクラス遊びの紹介と指導」を課題として出しておいたこともあり、第1回と比べ、最初から児童集団に対して積極的にかかわる学生の姿が多く見られた。授業参観の時の姿も落ち着いて参観できていた。

＜省察＞

2回の体験の後の事後指導では、単に体験を振り返り、観察した児童の表面的な姿だけに終始するのではなく、その行動の背景や意味などについて考えさせた。例えば、交流の中で取り上げられた児童の姿などに着目させ、全体で考えさせたりすることによって、児童の個性の豊かさ、成長しようと躍動する姿、担任教師と児童との関わりなどについて気づ

かせ、考えるよう働きかけた。

次の4つの記録は、S・Y(1年女子)が、第1回参観後にまとめた「学び得たこと(1-a)」と省察後にまとめた「学び得たこと(1-b)」、第2回参観時の「参観課題(2-c)」と参観後にまとめた「学び得たこと(2-d)」の記録である。なお、この学生が割り当てられたクラスは6年生である

＜第1回参観後の記録 1-a＞

- ・1日の生活の中で、教師は一人一人の児童の様子をともしっかりと見ていた。
- ・初め授業に集中していた児童もだんだん集中が切れていった。
- ・休み時間、自分の好きなことをしたり宿題をやるなど充実した時間を過ごしていた。
- ・鵜沼第一小学校は、特に児童と先生との信頼関係が深く学校生活がとても充実している。

＜第1回参観 省察後記録 1-b＞

- ・小学校参観を通して、学校、学級の雰囲気がとても大切だということが分かった。子ども同士や教師と子どもとの人間関係が深まっていると、とても温かい雰囲気のクラスをつくることがで

き、授業や行事など、いろいろな面で影響を与えることが分かった。

- ・また教師は、ただ児童に指導する大まかな仕事であるというイメージが強かったが、一人一人の児童の個性を大切にしていねいに指導していることを学んだ。
- ・休み時間や授業などいろいろな場面で、児童自身が「あれをやってみたい」などと、挑戦する意欲がわくような環境をつくっていくことが大切だと思った。

<第2回参観課題 2-c>

- ・前は1人1クラスという初めての経験で、緊張もあって、視野を広げて子どもや教師の姿を観察できなかったという課題が残った。今回は子どもの行動に対してどんな意図を持って教師が対応しているのか考えながら実習に臨みたいと思う。また、教室内で子どもとかかわるのももちろん、休み時間には特にたくさん子どもと触れ合っていきたい。

<第2回参観後の記録 2-d>

- ・今回は、前回に比べて、班全員で話し合っていて充実していた。休み時間には、前回あまり見られなかった、男女で遊んでいる姿があった。また室内にいる子を誘い合う姿も印象的だった。給食や掃除では、先生に言われる前に子ども同士で考えて行動する姿がたくさん見られた。
- ・今回の実習では、1年間を通して身に付けた力が一人一人の自信につながっていると実感した。また、子ども同士の絆が深まったことはもちろんであるが、担任の先生と子どもたちとの絆も深まり、クラス全体が成長したと思った。前回から今回まで半年という時間があつたが、この半年間という期間の大切さを感じた。

(1-a)では、授業中や休み時間の児童の姿を第三者的な立場から表面的に捉えている段階であるが、(1-b)では、実習したクラスでの子どもたちの様子や担任の先生への子どもたちへのかかわり方のよさや、クラスの雰囲気と教師の役割などについて自分なりに考えたことをまとめている。児童に対

する見方、その先にいる教師の在り方について理解を深めたことが分かる。

また(2-c)を見ると、第1回の参観を反省し、子どもとかかわる教師の意図、自らの姿勢など、より具体的な観点をもって参加しようとしていたことが分かる。(2-d)では、児童同士の間関係の細かいところにまで目を向けていたこと、担任と児童、児童同士の絆が深まり、「クラス全体が成長した」という言葉で締めくくっているなど、半年間に成長した児童個々、学級集団に感動している様子が読み取れる。

S・Y以外の他の学生たちも同様に、〈省察〉の機会を持つことで、〈体験〉を通して見たり聞いたり感じたりしたことを、深めたり、広げたり、関連づけたり、価値づけたりする見方ができていて、体験知として学生個々に定着させることができたと感じている。

(2) 教育現場体験 I (2016.9~2017.1 2年後期)

学生たちの将来像である教師の主要職務は、「授業」と「学級経営」である。この科目では、実際に小学校を参観し、授業と学級経営を直接参観することによって、教師の職務について具体的に理解し、教職への意識を高め、教職についての責任感を自覚させることを意図したものである。

学生たちは2年前期に「授業実践演習Ⅰ」を履修し、後期に「授業実践演習Ⅱ」を履修中である。「教育現場体験Ⅰ」では、この授業実践演習で身に付けた指導案作成の知識や模擬授業体験を踏まえて体験に臨ませ、逆に体験したことが授業実践演習の指導案作成や模擬授業に生かされるよう両科目間の往還を大事にした。

① 第1回教育現場体験 那加第二小学校

10月20日

<体験>

参観した授業は以下の通りである。

○2校時(低学年3クラス)…1年2組(算数「たし算」)、2年3組(算数「かけ算」)、3年1組(国語「ちいちゃんのかげおくり」)

○3校時(高学年3クラス)…4年3組(英語 How many?) 5年3組(国語「大造じいさんとガン」)、6年1組(国語「やまなし」)

学生は、低学年と高学年の授業を各1時間、計2

時間参観した。事前指導で、1年次の教育現場参観、2年次前期の授業実践演習Ⅰ、現在履修中の授業実践演習Ⅱで学び得た知識や技能を想起させ、教師の職務としての「授業」について参観課題を明確にさせ、授業記録の取り方等についても指導した。特に、現在履修している「授業実践演習Ⅱ」での、指導案作成演習、模擬授業体験を踏まえ、指導案に基づいた授業の実際を指導者の立場から参観するよう促した。また学生には、課題として、参観授業に関わる学習指導要領や教科書教材のポイントを押さえておくよう求めた。また当日は、授業記録用紙を持たせて授業記録を付けさせた。

那加第二小学校では、2時間で6クラスの授業を公開してもらえたため、学生は各自が希望する学年・教科の授業を参観することができた。また学生たちは、これまでに授業参観の機会を複数回体験していたためか、落ち着いて授業記録をとれていた。ノートをとっている児童の様子を近くで観察しようとする積極的な学生も出てきた。

<省察>

学生を2グループに分け、学生のレポートを基にしながら、「教師の職務としての授業」「授業を成立させる学級経営」の視点から話し合いをさせた。学生に進行をまかせ、教員2人はアドバイス役を務めた。

机間指導の意味、発問の意味、教材提示のタイミング等、交流の中で話題になった教師の教授活動については、その都度取り上げ全体で考えさせるようにした。

次の2つの文は、S・A（2年女子）が国語授業の参観後（1-e）と省察後（1-f）にまとめた記録である。

<授業参観後の記録 1-e>

・国語ということで、読ませる活動をたくさんとっていたのが印象的であった。読むときの姿勢を正したり、気持ちを込めて読み取るように声かけをしている姿があった。子どもが追究しているときは、座席俵を持ちながら回っていて、どんなことを書いているかメモをしていた。そのメモをもとに、発言の際には指名していた。また子どものノートに線を引いたりまるをうったり、考えを深めるような質問を投げかけるこ

とで、よりよい意見や考えを自信をもって発表できるようにしていた。…略…

<省察後の記録 1-f>

・今回の授業参観の交流をして、まずは学年ごとの発達段階を知り、それに併せた教材や授業を考えなくてはいけないと思った。クラス全員が内容をしっかりと把握できるような授業の進め方でないといけないと思うし、それは発問であったり、一目で大事なポイントが分かりやすい板書であったり、目を付けて児童を決め個別指導の時間にあてたりと、いろいろなところで良い授業をつくるための工夫ができるなど思った。良い授業をするには、教材研究からていねいに行くことはもちろん、授業で何を使ったら良いか、教材には何を使ったら分かりやすいかなど検討することが大切だと思った。

国語については、2年前期に「授業実践演習Ⅰ」で指導案作成の基本、模擬授業体験を履修していて、その知識をもとに参観し理解し得たことをまとめたものが（1-e）である。いろいろなところに目を付け、国語という教科の特性に目を向けてはいるがまだ表面的な捉えにとどまっている。それに対し省察後の（1-f）は、良い授業にしていくためには発達段階を踏まえる必要、そのための授業展開の工夫など、省察段階で広がった視野、考察を深めた様子が感じられる内容となっている。

② 第2回教育現場体験 鶴沼第一小学校

11月8日

各務原市立鶴沼第一小学校が、各務原市教育充実ステップアップ事業の指定を受け、11月8日の午後、授業公開（2時間）と分科会（研究会）を実施した。本学ではこの機会を第2回教育現場体験に組み入れ、学生も市内の現職教員と一緒に参加した。

<体験>

公開Ⅰでは13学級、公開Ⅱでは10学級が授業を公開した。その後の分科会では、公開Ⅱの授業についての研究会が持たれた。学生は2時間の授業参観の後、分科会にも参加させてもらった。

事前に入手した「公表会指導案集」を基に、各自が参観する授業の指導案を熟読すること、該当する教科書教材に目を通しておくことを課題に出し当日

の授業参観に臨ませた。また、分科会では指名されたら積極的に意見を述べるよう指示した。

各分科会では、参加した教師たちが少人数のグループに分かれて授業研究の討論が行われ、本学学生（各グループ1，2名）もその場に参加し話し合いに加わった。どのグループでも意見を求められていたが、中には、臆することなく自分の意見を述べていた学生もいた。

#### <省察>

事後指導では、分科会での体験が中心となった。現職教員たちが参観した授業について様々な視点から分析し意見を交わし合う光景に新鮮な驚きがあったようである。

分科会で取り上げられたのは「公開Ⅱ」の10クラス授業で、学生はいくつかのグループに分かれて参加したため、体験内容は様々で、授業内容についての共通の話題化は難しかったため、現職教員たちがこのような研究会をもつ意義に焦点を当てて話し合わせた。

次の文は、Y・T（2年女子）が省察後にまとめた記録（2-g）である。

#### <交流後-省察後-の記録 2-g>

- ・児童の挙手が少ないときは、発問の意味が分からず理解できていないときだと分かった。そのため、発問は何を聞いているかのかが明確に分かるようなものでなくてはならない。
- ・自分は授業を「すごいな、こんなやり方もあるのか」と見ていたが、分科会での様々な先生方の意見を聞いて改めてそのようなやり方もあるのかと思ひ、様々な意見を自分の授業（模擬授業）に取り入れようと思った。
- ・こうした会で自分の意見を出すことで、これからの授業の内容が深まったり、各学校での授業のグレードアップにつながったりするのかと思った。
- ・私も、大学で模擬授業をするときには、他人から良いところや直すべきところなど聴いて直したいと思った。

「各学校での授業のグレードアップにつながる」という言葉の中に、この学生が研究会の本質を捉えていることが読み取れる。また、児童の反応を受け

ての授業展開の仕方や分科会でのよさ（互いに研鑽し合う）なども取り入れ、今後の学修に生かそうとする姿勢も読み取れる。

「教育現場体験Ⅰ」では、教師の職務としての「授業」以外にも、「学級経営」についても目を向けさせることを意図していたが、これについて、S・A（2年女子）は、次のようにまとめている。

#### <学級経営について>

- ・授業をよりよいものにするためには、学級経営は欠かせない大事な要素であることを改めて感じた。先生が例に挙げていたように、授業の進め方と学級経営は、車の両輪のような関係だと思う。
- ・自分が見せていただいたクラスも、担任の先生と児童との信頼関係があるからこそその場面も多々あったし、お互いに気持ちを分かり合っているからこそ、発問にもつぶやきがあったりして授業がうまく成り立っているのだと思った。
- ・教室環境も児童が集中しやすいような配慮がなされていてとても参考になった。

教師の職務としての「授業」や「学級経営」についての理解は、この科目の履修を通して学生たちの中に確実に定着しつつあると感じた。これには、「授業実践演習Ⅰ」、「授業実践演習Ⅱ」との学びの往還も効果的に作用し合っているのは確かであろう。

### (3) 授業実践演習Ⅱ（2年後期）

小学校教育実習の準備教育として、指導案作成の基本的な考え方や作成の手順についての理解やその指導案を基にした授業実践体験（模擬授業）、いわゆる「授業構成能力」が求められる。この「授業構成能力」について、角田将士は『体験と省察を基軸とした教員養成カリキュラムの充実のために(1)』の中で、「教員の仕事の大部分は、教科の授業である。そのように考えれば、教員に望まれる資質の中核をなすのは、各教科の授業構成力である。それは、教員が自己の主体的な責任によって授業を創造し、場合によってはそれを修正し、よりよいものに変革していける力のことである」と述べている。「教育現場体験Ⅰ・Ⅱ」とリンクさせることで「授業構成能力」を育成しようとする科目が「授業実践演習Ⅰ・



Ⅱ・Ⅲ」である。

この科目についてはまだ履修中であるのため、次の設問に回答した学生の反応から、その効果を予測することに止めたい。

Q：「授業実践演習Ⅰ・Ⅱ」で学んだことが、授業を参観する上でどんなことに役に立ったか。

- ・授業展開の仕方や授業中に子どもの意欲を引き出す方法が参考になった。
- ・先生がどういう意図から発問するのか、何を学ばせたいのか、指導案から読み取れるようになった。
- ・時間配分や授業の進め方のだいたいの目安がわかったところがよくわかった。
- ・教師が何に配慮しているのか、表面的に見えるもの以外にも目が行くようになった。
- ・指導案作成で児童の反応の高まりを学んだので、児童の姿に着目して参観できた。
- ・社会科の指導案作成で資料の重要性を学んだので、実際の授業を見て、資料の効果を分析しながら参観できた。

一部の学生の回答ではあるが、「授業実践演習Ⅰ・Ⅱ」で実際に指導案を作成したり模擬授業を体験したりした経験が、実際の授業を参観した際、授業展開の流れ、発問の意図、指導案の読み取り方、教師の配慮等に目が向いている様子を読み取ることができると判断できるのではなかろうか。

## 8 今後の方向性

今回は「教育現場参観」と「教育現場体験Ⅰ」「授業実践演習Ⅰ・Ⅱ」について取り上げ、科目のねらいが達成されているか、学生の記録を基にしながら〈体験〉と〈省察〉を軸として中間評価を試みたが、学生の体験に臨む姿勢、体験後や省察後の記録等からは概ね達成できていると判断できる。また科目間の相互往還による効果も認められる。但し、〈体験〉や〈省察〉の質については、改善の余地がまだまだある。〈体験〉でいえば、何をどのように観察し体験させるのか、〈省察〉では、省察したことをどう科学的・構造的に捉え直しをさせたらよいのかなど、見通しが明確でないまま実施していて、科学性に欠けるところがあった。〈体験〉と〈省察〉の質を今後どう上げて

いくか、さらに検討を加えていく必要がある。さらに、受講学生の中には、小学校教員免許状の取得だけを希望する学生が3分の1ほどいて、教育現場での厳しい体験を求めていくことの限界も見受けられるところがあり、このような学生の履修についても今後検討していく必要がある。

完成年度まではあと2年あり、来年度には「教育現場体験Ⅱ」「授業実践演習Ⅲ」「学校インターンシップⅠ」を、最終年度には「学校インターンシップⅡ」「学校インターンシップⅢ」を履修することになる。これらの科目は先にも触れたが、教職科目、教科科目などと相互に往還し、螺旋型に発達しつつ最終的に「実践的指導力」の基礎を体得させることを意図したものである。今回の中間評価を踏まえて、より質の高い〈体験〉と〈省察〉の往還を大事にしながら科目の運営に当たりたい。

## <引用文献>

- ・『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について』（教員養成審議会第1次答申 1997.7）
- ・『今後の国立の教員養成系大学学部の在り方について（報告）』（文部科学省 2011）
- ・『教員養成カリキュラムモデルの検討1』（基準WG. 主査 岩田康之）
- ・『教員養成カリキュラムの豊かな発展のために－〈体験〉と〈省察〉を基軸とした「モデル・コア・カリキュラム」』（日本教育大学協会 2006.3）
- ・『教員養成における「モデル・コア・カリキュラム」の研究－「教員養成コア科目群」を基軸にしたカリキュラムづくりの提案－』（日本教育大学協会 2004.3）
- ・『体験と省察を基軸にした教員養成カリキュラムの充実のために(1)－授業構成能力の育成による「大学」性の自立－』（角田将士 2006年）